

第5話<お取越し>の要約と参考資料

第5話の要約

土呂久では毎年1月、浄土真宗の開祖親鸞に感謝するお取越しがおこなわれます。泉福寺の僧に、寺の代役をつとめる講元が付き添います。講元の家にある土呂久講中の仏壇の前で読経する光景から、阿弥陀仏に共に帰依する一体感と安心感が伝わってきます。

第5話の参考資料

5-1 お取越し

泉福寺住職藤寺心一さんの話（聴取時期不明）

宗祖親鸞聖人の御恩に報謝するのが報恩講。お寺では親鸞聖人の命日（陰暦11月28日、陽暦1月16日）に<御正忌>をとりおこなう。地方によっては、農繁期をさけて農閑期に回す。岩戸では1月16日。御正忌の前に各部落でおこなう報恩講をお取越し。あとでおこなうのをお取延べとりのという。お取越しの残っているのは、高千穂と滋賀、岐阜の一部だけじゃろう。

佐藤ミキさんの話（1977年1月8日）

お取越しちいうて、正月から2月ごろまで、（岩戸中を）坊さんが経を読んで回る。土呂久では、惣見、畑中、南を回って、全部すめば、講元で飲むことになつとる。坊さんが回ってきたとき、各戸は米とだんごをひいてつくった「おまいもん」を配らなならん。大人も子供も、昔はぞろぞろついて歩いて、みんな2つくらい妻袋という袋に、お茶菓子入れて、お茶を飲んで回った。

5-2 講元

佐藤正四さんの話（1982年8月25日）

「こぼんさん」ちいうのは、坊さんの代理ですね。坊さんが来れんとき（葬式が同じ日になることがあるので）は、法名だけ寺で書いてもらって、講元が坊さんの代理でやりよった。よその寺は小坊主がおるが、泉福寺にはそれがないもんですから、村に講元をつくっておいて、講元が代りにやる。

5-3 お取越しルポ（1977年1月22日）

1月22日（惣見組）

僧一心のあとに講元の長男洋さん、惣見の寺世話の金男さん、そして惣見の衆がつい

て回る。手には、口もとをひもで締める「つま袋」。鶴江さん方、午後4時ごろ。一心坊、お経（讚仏偈）を読む。村の衆、声を合わせる。約10分。「南無阿弥陀仏」の名号を唱えて終わる。子どもたち、正座して大人のまわりを走って回る。鶴江。「お寒うございます」。手をついて、まず一心にあいさつ。つづいてみんなに向かって……。女子はお茶出しの手伝いに立つ。芥川さん（写真家）が目の悪い鶴江さんに代わって、みんなに菓子（おまいもん）を配って回る。一心「欲得はなんもない。さしだされたものはありがたくいただきます。報恩感謝じゃ」。

夕方から雪になる。小雨の中、惣見橋のたもとの空き家の前で、一心坊、手を合わせ、「南無阿弥陀仏」。「町」でお茶を飲むとき、一心坊「雪景色もきれいなものですな。桜の花が散るようじゃないですか。雪というのは女子の化粧のようですな」。寺世話の金男さん宅。お経の終わったあと、金男さん出てきて「どうも本日は、お参りありがとうございました」と言って、仏壇の間の隣、コタツの部屋へ案内する。日本酒の振る舞い。

寺世話は毎年せんぐりに替わっていく。それにつれて、座元も替わる。この年の座元は「富高屋」。カジさん宅である。テーブルを囲んで、焼酎、うどん、煮物、五目ご飯。夜11時ごろまで飲んで、外へ出たとき、5センチほどに雪が積んでいた。一心坊は、8時ごろ、タクシーで泉福寺へ帰った。

*この年は、1月23日に南組と畑中組をまわって、2日間でお取越しは終わった。